貴重書

函南町の昔ばなしと伝説

（第一集）

函南町教育委員会

『昔話』

上沢耕地のきつね

軽井沢　沢里散位

平井村の元さんこと元右衛門はがあばち（我意）の強い人であった。ある日久しぶりに雨が降ったので、気の合った同志で寄合ってお茶をのみながら四方山の話に花を咲かせていた。

その時、誰かが「近頃、上沢耕地にきつねがいてよく人をだますそうだ。」と言い出して、平井村や上沢村の誰かが、ばかされた話をするのであった。それらのばかされたという人達の中には、日頃大変真面目くさったふりをしている人もあったので、話は一層面白おかしくもてはやされるのであった。だが、元さん一人はみんなの話相手にならず、苦虫をかみつぶしたような顔をして「世の中に人間が、きつねにばかされるなんて、ばかなことがあるわけがない」というのであった。

一座のみんなは、元さんのがあばちの強いのをよく知っているので、あんまり逆らわずにその日は解散した。

それから程なくした秋の終り頃である。一時は韮山さん（江川太郎左衛門）が死亡する少し前だったので、嘉永か安政の頃であろうか……。

元さんは、三島宿へ用たしに行って帰りがおそくなって上沢耕地にさしかかったのであった。細い真直な道の両側には、取入れをすませた田んぼが続いている。道の中程まで来た頃であったろうか。視ると夜目にもはっきりと一人の女が見える。

「はて、今頃こんな処に女が居るとは」と元さんが、いぶかりながらよく見ると、それはなかなかの美人である。元さんが、平井村や上沢村や大場辺でもついぞ見かけたことのない大へんあかぬけした年増である。

視ていると、女は元さんの慾情をそそるような風情を示しながら、つとかたわらの田んぼの稲むらの陰に消えてしまった。「ふーん」元さんは大きく息をすると「これは思いもかけない都合のいいことだ。」とつぶやきながら稲村の方へ近よって行くのだった。

だが、その時元さんは、ふと先ごろの雨降りの日に聞いた友達の言葉を思い出した。「上沢耕地にはきつねがいて人をだますそうだ。」「ことによるとあの女が、きつねかも知れない」そう思い返すと、元さんは、稲むらの一歩手前で立ち止ると、「よーし、そうだとすると、きつねの野郎、次には、

きっと変った格好で出てくるに違いない。その時は、とっつらまえてやろう。そうして、友達等に「きつねが人間をだますことなんか、うそのかわであることをみせつけてやろう」と心に決めたのであった。

そうして、夜の更けるのも忘れて、稲むらの陰からきつねの出てくるのを待ちかまえているのであった。やがて、何刻かたって、東の空が白みかけたが、それらしいものは何も出てこなかった。

いつまで待っても、きつねが出てこないので、待ち切れなくなった元さんは稲むらの中へ飛び込んでみたが、きつねどころか鼠一匹いなかった。「こんな筈はない。きつねの奴め、どこへ行ったかな。」

元さんは一生懸命稲むらのあちこちを捜しまわるのであった。

その時、「元さん。」と誰かが元さんの肩を叩くのでハッとして振り返ってみると、近所の若衆達が二、三人ニヤニヤ笑いながら立っている。ゆんべ三島宿で女郎買をして朝帰りだとのことである。

元さんは、若衆の手前、きつねにだまされたとも言えないので、きれいな若後家がその辺の稲むらの陰にいるらしいと言うと、「そ、それがきつねだよ。」といって若衆達は大声で笑うのであった。

『伝説』 その一

上沢のなぞの石

上沢、字向野の畑（渡辺徳孝家所有）にある。直径一メートル位の扁平丸型の自然石の平らな面に矢筈様のもので彫ったと思われる⊕と亥の方五百間と思われる字等を点彫りにしてある。

丸に十は方位を示すものと思われるが亥の方は北々西五百間のところに何か貴重なものがかくされているらしいが場所もつかめず未発掘のため何が何やら不明で、区民は「なぞの石」と呼び上沢老人クラブで標札も建てたが珍奇に包まれている。

その二

廃寺、上沢養沢寺に絡る
赤王入道の伝説

古文書もないので、詳細には不明であるが上沢字養沢（伊豆箱根鉄道大場駅より東北二Km、付近に三島市大場字赤口が

ある）に恐らく足利時代から戦国時代に一大加藍があったと伝えられる。この伝説を裏付けるものとして太平洋戦前同地水田の地下から寺院の柱とみられる大きな埋れ木数本と焼籾多数が出土した。（作人富田吉雄氏談）又背後に田方平野を一望に収める高台があり、その南斜面に五十余基の横穴古墳が連っていた。同地はその名の如く湧水も豊富で、前面は開田で守り易い地形であった。筆者の幼少な頃は附近水田の畦畔に多数の五輪の塔が置かれてあったが、どなたの墓か相当の高貴な勢力者の墓であったに相違ない。この五輪は故豊竹幸三郎氏の手により上沢区内東光寺に祀られたが、その後赤口に疫病が流行した為に「赤王入道のたたり」と恐れて赤口の人達が東光寺に懇請して赤口の寺に祀り供養したと言われている。

さて故老の口碑によれば、この養沢寺に赤王入道がいて、この辺一帯を支配し、僧兵を使って平素は田畑を耕し、一旦兵火の際は干戈を執って戦っていたが、或る時不意に敵の襲来を受け寺院はまたたく間に兵火に包まれ入道の身も危くなった。これは入道の妻女がひそかに敵に通報した為と分り、入道は大いに怒かり谷田口まで追跡して遂にこれを斬ったという。

因みに旧養沢寺の跡地は現在谷戸の横穴古墳遺跡と共に寺岡製作所函南工場（布テープ製造）が建てられて昔時の面影はない。

その三

朝日さす黄金千両

古老の口碑によれば、上沢区の入口にかかる沢川橋を渡って鰻ケ入道路をまっ直ぐに約二、五〇〇米更に左折して佐波山（石原山ともいう）の山奥に巨岩があり次のような伝説が遺っている。

朝日さす夕日輝く白つつじ
黄金千両、二千両

と。古老等は江川さんかこの地の支配者が巨額の軍資金を上沢地内のどこかに埋めその目じるしとして白つつじを植え一旦緊急の際は堀り起して役立てようとしたものだろうという。その白つつじは山は滅多にないので露木本家の裏山あたりではなかろうかと噂されているが、果してまださぐり当てた人はなく只この一首が今も里人により伝承されている。

その四

丸山およしと
カイテン、テンメイなど

明治も末葉へかけての話である。今は上沢台団地となっている所は通称丸山と云って、丸い塚型の山で大部は櫟や楢の落葉林で頂上に十数本の松がそびえて、その間に両三基の古墳（丸山古墳）があった。この山には、昔から「丸山およし」という牝の古狐がすんでいて夜な夜な区民を驚かすという事であった。だが誰もその正体を見届けた者はなかった。

その頃、区内に狐つかいのおばあさんが居た。年の頃八九十才にもなったであろうか。見るからに俗人と違った風格の白黒交りの髪の毛としわの寄ったおばあさんだった。

村に病人が出来ると昔は、〇〇のたたりだ。方位がどうの、狐のせいだ。丸山およしにとっつかれたなど云った。又首つりの人が出ると神がかりで連れて行かれた等と云ったものだ。

そこで、この不思議なおばあさんを病人の枕元へ呼んで祈禱してもらい平癒を祈ったものである。件のおばあさんは病人の枕元に行って、やおら手を合せ何やら呪文を唱え、一心になってカイテン、テンメイ〳〵〳〵と数時間繰り返すのだった。

全身汗びっしょり、頭髪は逆立ち眼からは御光がさしてどうやら狐が身体に乗り移って、真妙な神のお告げがあるらしい。

こうした毎日が続いた或る日病人の気分も幾分和らぎ家中の人達の顔も少しはほころぶようになった。カイテン、テンメイのおばあさんのおかげである。丸山のおよしとこのおばあさんと何らかの約束事があるのか信者も次第にふえてくる。

次は、八ツ溝の某家の夜日待によばれた秋も取入れもすんだ晩の事である。上沢耕地に差しかかると地平線上に右往左往する何百何十の大小の灯が連っている。これが世に云う狐っ火というものか生れて初めてこの眼でみたがこれが初めの最後であった。

又韮山小の同僚某が内浦での臨海学校で心臓麻痺を起して水死した事があった。同郷の関係から遺体を守り同夜深更までお通夜した時の事であった。午前一時を越した頃と思う、縁側に腰掛けていると彼方大土肥の妙高寺の森のあたりから異様な音もなく突然不気味な火柱が上った。人玉があるか無いか聞かされた事はあるが、この時程切実にその情景を眼のあたりにした事はない。体は冷汗一杯で今思い出してもゾッとする。

その五

証文坂のいわれ

今でこそ函南、沼津線の県道で立派に拡幅舗装され、坂も緩やかに改装されているが昔はきつい坂道だった。

この地点は田方から箱根山へ草刈や薪採りに登る坂であり平井村から観音橋を渡って上沢村へ入る「韮山街道」筋でもあった。

この坂を昔から証文坂と呼んでいる。江戸時代のいつの頃かはっきりしないが箱根山入会権の事で山方の地元桑原村地域と下部落（田方方面）の人達がこの坂で仲直りの証文を交わした所から証文坂と名づけられたと言い伝えられているが証文の内容については保有者が不明なので分っていない。

（註）　此の附近に巡礼供養塔数基があったが昭和五十年上沢臨江寺境内観音堂前に移された。

その六

左次えんどんの仲直り

上沢村近辺では昔から喧嘩のある度に出る言葉に次の文句がある。

「左次えんどんの仲直り」

正しくは左次右工門の仲直りというべきであろうか。左次右工門は赤口の人か大場か上沢かは分からないが喧嘩の仲裁に入る位の人だから腕力も説得力も相当自信のあった人と思われるが喧嘩の相手同志でなく却って仲裁した人が殺されるという気の毒な最後に終った。

これを憐んで三島市大場赤口の人達が石の祠を建て左次右エ門を地蔵に祀って毎年供養している。祠は上沢団地の頂上三島市との境界に近い大場赤口分にある。

以前は上沢の人達も参詣したようであるが一部の人達を除いて、左次えんどんの仲直りの言葉は知っていても地蔵の在る処は忘れられている。

キツネトテキサエツケバナニコニ

大土肥　松井善作

昔の大土肥村は、曲りくねった来光川の両岸に広い竹ヤブが続き、大土肥洞のほとりに人家が点々と存在し、現在では、とても想像も出来ないような、うっそうとした妙高寺の森と雷電神社の森が生い繁り、熱海街道の両側は高い土手となって雑木が生いかぶさって昼間でも暗い様な薄気味悪くこわい所でこの辺り一帯を狐塚といい、多くの通行人が狐つきになったとか、狐にだまされたと云うお話しが伝わっています。

その一

祖父は木挽職（木こり）で、朝早く仕事にでかけ、夜おそくになってかえってくるのが日課でしたが、たまには仕事先で泊ってくる時もあったそうです。その留守は祖母と小さな子どもたちだけで、祖父がいない晩は大変淋しく不安だったそうです。

ある夜、祖父の留守の晩、みんながねしづまった真夜中にトン〳〵と雨戸をたゝく音と共に、「今晩は〳〵」と起すものがあり、その夜は気づかぬふりをして、ふとんをかぶっていた。次の夜も同じ様に雨戸がたたかれ、薄気味悪さに一晩中ふるえていた。その翌日の晩は雨戸をたたき乍ら「俺だ、起きろ〳〵」と言う祖父の声がしたので灯をつけて戸をあけてみたが人の気配はなく、外へ出て家の廻りを見まわしてみたが、人影はなく、ふと下を見ると田んぼの方に灯が行ったり来たりしていた。おかしな事もあるものだと、一層戸締りを厳重にしてその夜はねた。翌日祖父が仕事からかえってきたのでその話しをすると、「それは狐のいたずらで俺など度々狐火を見かける。」といって別に気にとめる様子もなく、昔からキツネトテキサエツケバナニコニと云うオマジナイがあると教えたということです。

その二

或る日、まだ暗いうちに仕事に出かける途中で、とある畑の中に人影がみえ、何やらブツブツ云っているようすなので近づいてみると、隣村の甚兵衛さんが着物の尻をまくり「アー深い〳〵」と云い乍ら畑の中を歩いているので声をかけるとやっと気がついて我にかえり「昨夜おそくここを通りかかると目の前に急に川が広がり、こんな所に川があるはずはないとは思い乍らもすぐに渡れそうだったので入り込んだが、だんだんと深くなって困っていた所だときまり悪げに話してかえったそうである。

その三

昔から大土肥に過ぎたものが三つあるといわれている。

一、竹やぶ（来光川ぞいの竹林）

二、妙高寺の釣鐘（八ッ溝用水分水の鐘）

三、山本家（代々御典医の家柄）

座頭穴の伝説

柏谷　佐藤信義

柏谷と畑毛の村ざかいに稲妻堰と云う用水堀があります。その近くの小高い所に百五、六十坪の長細い畑があり、その登り口に小さな無名の石碑が立っていました。私の家で近くに田んぼを作っていたが他人の土地のことで余り気にもしないが自分の田の目の前にあるので何時も目にとまり、近くの田のお爺さんに、その石碑のいわれを尋ねてみました処、そのお爺さんの話に怨恨の恐しさを聞かされました。此の奥に座頭穴がある、何百年かの昔、旅の六部と云う坊さんが住みついた処、急に手足がしびれ痛くて歩行も困難となっていた処へ畑の主が来た。六部坊さんは畑の主におがむように、私はお金は沢山持っている。このお金は全部あなたに上げるから是非私に食を与えてもらいたいと、持金全部を畑の主にやってしまったが、畑の主はそれっきりこの穴に寄りつかず、六部坊さんはこの穴で、しびれ苦痛と餓えて死んでしまった。それから間もなくこの畑主も体じうしびれ苦しみ食も喉を通らず苦しみながら死に、その畑主の家は次から次えと不幸が重なり、易者にみてもらったら、長袖の六部のたたりじゃ〳〵と云われ、事訳を知っている家族は急にこの六部穴の畑が恐しくなり、捨て値のような値段でこの畑を他人に売ってしまった。この畑を買った人は又同じように体中しびれ食が喉を通らず同じ病いで死に家庭は不幸つゞきとなり、易者にみてもらうと、長袖六部のたゝりじゃ〳〵と云われ、又々捨値でこの畑を売り、こんな事が何遍もくりかえされ、しまいには買手も、もらい手もなくなり気味悪い畑として人も遠ざかるようになった。こんな評判が広まったある時通りがかりの、えらい坊さんが、その六部坊さんは気の毒なことだ、お経をあげて供養してあげようと小さな碑を立て供養したと云う、その碑であると教えてくれた。私は四、五十年前のまだ嫁にきたばかりの若い時の話であったが霊魂の恐しさを、しみじみ聞かされ如何に貧乏になっても人の弱身につけこむような、いやしい心を持たないように心がけ鍬一本で土としたしみましたおかげで財産はなくても、すが〳〵しい心で歳老いても幸せに毎日をくらしています。この土地も開発が進み地形も変り、あの碑も穴も消え去ってしまい座頭穴の伝説だけが残

っています。

座頭穴の伝説つたえ　の声

田植歌

一、しのんでくるのはうれしいけど
　雪駄鳴らしちゃこまるよ私
　鳴らさではだしでくるがよい
二、伊勢編笠の八ッ房を
　蒲原のモガリに掛けて忘れきた
　花見にもらった八っ房
三、苗植え張りの繩赤布も
　八つ房に見えちら／＼と
　あの人今ごろ何してござる
四、十七八を抱いて寝て
　私を忘れちゃこまるよもだえ
　張り繩赤布が八つ房に見え
五、代掻き殿の腰見なされよ
　泥帯腰に咲いた黄金花
　黄金花ふりまきならし苗植る
六、黄金花くさけりゃ植田の手も早い
　金欄たすき加賀縫糸で
　目出たや加賀の百万石
七、苗もつ手さばきさら／＼と
　雨が顔打つびしょ／＼と
　寒さふるえもいとやせん
八、赤子泣く声思い出し乳張って
　ぼた／＼乳胸濡れてくる
　びしょ濡れ雨より胸つらい
九、お地蔵様も雨に濡れ
　植田良きよう手を合す
　まんがあらいも近いうち
　地蔵祭も盛大に地蔵祭も盛大に

麦打ち、麦搗唄

昔は麦の収穫期になると、方言の違う他所の女衆が三、四人づつ組になって、この地方に入り、割竹の麦打枠（麦こき機）で麦穂を落し、（アオ）（クルリ）と云うもので麦粒をはなし更に臼で搗いて（ノギ）落しをしながら作業歌をし賑やかな麦秋期でした。

一、麦を搗くのはつらいを女郎
　おん手に豆が九つできた
　九つ豆を見るたびに
　親の在所が恋しうて
　恋しくば送るべえもの鹿毛の駒
二、鎌倉じゃ女ひでりでこまってる
　さるをあつめて麦搗かす
　さる三匹に小杵が三っつ
　どれも「どんす」の前掛で
　赤けつかいてはとん／＼
三、麦搗いて夜を麦搗いて浦浜え
　伊勢舟の船頭に袖ひかれ
　よせはなせたもとをはなせ
　わあしゃ人の妻だもの
　船頭にゃでっかい舟あるじゃ
四、麦搗いて夜麦搗いて
　こゝの亭主にほれついて
　臼よこに麦わら畳敷きつめて
　一夜枕の夢の妻
　眼ざめりゃアホーと
　からす鳴く
五、面白やあんどんつけて
　男と向ひ麦を搗く
　臼が八つに杵が十六
　搗かれた麦が八石八斗
　八っあんとっつあん喜んだ

この歌詩は私の友人中伊豆町地蔵堂の山葵事業家飯田保平（呑吐）さんが少年頃記しおかれたものを互いに少年期の昔を回顧して少し修正した処もあります。

柏谷　佐藤信義

のろキンは智者だった

柏谷　佐藤信義

畑毛の井上さんに大正の頃、正直一徹の雇人がいました。本名はあるだろうが、井上さんは「キンや」と呼び畑毛の人々は「のろキン」と呼びこの人は人柄の良い人でしたが、話がのろく、言葉の合間に「キン」と必ず云い「じれったい」ような話ぶりの為「のろキン」と呼ばれたのでした。井上さんは毎年正月七日に私の生家に年始廻りにきましたが、ある年の正月七日私の祖父との話に、今年は正月早々キンやにひどく叱られましたよ、主人が雇人に叱られるなんて、おかしな話だが、夕方キンやが堆肥の中に何か、かくしていると女中の報告で外に出て見ると、キンやは堆肥によごれた手を洗いにきた。正直者のキンやでも何か出来心かと思って正月早々何をしたかと叱りつけた処、キンやは不服顔をして、「だんなはん、キンあしたは初山だがらキン車の油をキン、凍らしちゃキン朝からこまるからキン、堆肥の熱でキンのくとめてるですキン、だんなはんはキン何年百姓をしても油の凍るを知らねやですかキン油はキン朝あぶってつけるとキン思ってるキン、百姓の仕事はかんぎゃあてやるもんですキン」とやられちまいました。時々キンやには不思議な智恵が出るので正月早々一本参いったが五十銭（当時一日の日当）をくれてほめてやりましたと。

次は翌年の夏のことである。キンやは山に草刈りに行ったが、夕方になって、空車で一草も持たず、見れば荷車の片輪を「ふじづる」でぎりぎり巻いて帰ってきた。話を聞くと「以下キンを略します」山に登る途中車の片輪鉄がはずれたが草は、うんと刈って干してあるから明日持ってくると云い、車を修理するだから、屋敷内で火を焚かしてくれと云うが、素人に車の修理が出来るものか直ぐ車屋に修理に行きなと金を持たしたが受取らず、百姓道具は自分で修理するものだと、火を焚き何をするかと見ていたら鉄輪を火中に入れてあたため、木の葉に包んできた松ヤニを鉄輪の内部に熔かし塗り木車枠にするりと嵌め込んだ。普通素人はハンマー等であちこち叩いて嵌めるがすぐはずれてしまう。キンやの技術は松ヤニでハンマーも使わず、するりと嵌め込み、松ヤニで、かためたから絶対にはずれない。井上さんは感心して金三円を与え（六日日当分）村中にキンやの利巧なことを伝え、以後のろキン、と云わせず、キンさんと呼ぶようにさせたそうです。

正月の準備行事

1. 大掃除

十二月の二十日から二十七日までの晴天日を見て朝早くから行います。家の中の諸道具を全部外に莚を敷いて出し、畳を上げて外に出し二枚組に、おがみ立てにして干します。古い神札やおしめ、古達磨や古い神祭り物、古い仏具もすべてを屋敷の片隅に集めておくと子供が「どんど焼」用に集めにきます。笹竹三本をからげ頬かむりをして家の天井から家の中外のすゝやクモの巣を払い、この笹竹は古い神道具と共に「どんど焼」の処におき子供に集めてもらいます。

家の中をすっかり拭き掃除して、外に干された、おがみ干しされている畳を二人で両側から細い棒で叩きほこりを落して家の中に敷きます。

外に出された家財道具も総べて外で拭き掃除をして家の中の元の位置に収められます。昼食は大掃除だんご「米粉だんご」を平たく押し真中を親指でおさえたもの」を水煮して醤油又はきな粉をつけて食べるのでした。

大正の初期頃までは駐在所巡査が結果を戸毎調べて廻りました。

2. お飾り作りと種類

(イ)しめ飾。は三本縄に神棚の寸法に合わし作り注連紙を等間隔に四連下げ、大神祭、床の間、玄関常口上、その他家敷神や臼に。

(ロ)宝船しめ。お恵比寿様に、

(ハ)年神飾。大神様と同じ寸法の新品の五分板を買ってきて、その長さと同じに葉先を編み厚い葉袴を竹を割ってはさみ、大神様の前又は横に祀る。

(ニ)稲穂飾。三つ縄しめとし中間に穂を下に下げ垂らし縄の元と先を丸く目がねにしばり、注連紙、こんぶ、うらじろ、ゆずり葉、橙、干柿一串をもって飾り、玄関、床の間、お倉、に飾る。

(ホ)はさみ飾り。藁の大つかみを中間より三ツ縄としたものを二本作り真中を捻って四十五度に開きはさみ状としたものに、注連紙、裏白、ゆずり葉、橙、干柿三つをつける。玄関、倉庫、床の間に稲穂飾の代用としてその他納屋に飾る。

(ヘ)若(輪)飾。藁小づかみ、の中間より三つより縄とし、縄の部を輪にして藁元を垂らし、輪の部に注連紙、裏白、ゆずり葉をつけ、農器具、牛馬屋、荷車、仏壇、堆肥上、屋敷神等に飾る。お飾りの種類や飾る位置は家によって多少ちがいます。門の竹三本に松竹梅に一般には余り飾

られず主に商家の門松とされていました。

3. 飾揚き

十二月二十八日、三十日、三十一日で、二十九日はいみきらわれています。（但し浜の漁家は二十九日を好日としています。）

臼の下と周囲に新藁を薄くバラリと清め敷き、揚柄に「つば」は禁じられ、手合せ女は新手拭で、あねさんかぶりして揚きます。

4. 神々の当番

氏神の当番組は大鳥井注連、氏神の松飾、その他氏神境内の松飾、鏡餅と末社お供へ餅と若飾を上げ、大晦日には鳥井の両側から国旗を交さくして立て、社殿前に両側に五色の旗を立てる。又篝火用の木根・こ等を社殿前に準備する。

青年団は山の神と厳島神社に注連とお供へ餅を飾る。

八幡宮、秋葉宮、愛宕宮はそれぞれ講中又は当番組が歳の神は近所の者がそれぞれ注連又は若飾、お供へ餅を飾って神々の正月を待ちます。

柏谷　佐藤信義

正月の行事

1. 元旦は零時を期して、神主が氏神のお扉を開けるのを待ち一番太鼓を鳴らすため子供や青年が神主の後につゞき氏神様に走り集ります。夜明け頃から木の根っ子等の大篝火を焚き部落中老若男女一人のこらず賽銭又はお米の白紙おひねりを投げて三ケ日の間にお参りします。忌中の者一家はお参りできません。

2. 三ケ日は家の主人が早起して若水を汲み、お勝手炊事雑煮を作り神祭りを済まして家の者を起し、皆新年の服装をして坐り屠蘇を吸んで家内一同新年お目出とうをとなえ目出たい正月元旦の朝を迎えるものです。

正月三ケ日の朝は女はお勝手ごとをしないもので主人が行います。

3. 学童は紋付羽織袴で学校にゆき元旦祭で学童全部出校してとしのはじめの次の歌を合唱します。

「としのはじめのためしとて、おわりなき世のめでたさをまつたけたててかどごとに、いわう今日こそめでたけれ」

そして日の丸とれんたい旗の型のついた、せんべいか紅白のうち菓子を戴いて帰りました。

4. 元日の家の主人は神主の家と菩提寺にそれぞれ家の財に

応じてお米とお年玉を持ち年頭挨拶をした後、年玉袋入の手拭一本づつ持って部落親戚を戸毎に廻礼する。

5. 二日朝。初うない（鍬はじめ）

新品の野良着、新品の地下足袋で朝霜の内に麦田に入り、土を盛り上げ、榊を立て、お供餅とおひねり米と塩を供え、田の神を祭って三〇分ぐらい麦耕作をする農儀式（うない初めとも云う）

6. 三ケ日は家の内外箒を持たない。

7. 四日寺のお尚さんの年始廻り

お尚さんのくる前に松飾は全部はずしておくものです。

8. 四日初山

鎌、鉈を全部持ち、お供へ餅とおひねり米を持ち切透しの山の神に参拝して山に入る。山仕事を少しして「勝の木」の大小を切って帰り、太いは鎌柄ほどのものを皮をむき、約三〇センチのものを中ほどまで縦に十文字に割り切り、二本か四本、神棚に上げておきます。千百俵俸です。

9. 七日　七草粥

セリ、ナヅナ、ゴギョウ（ハハコ草とも云う）ハコベ、ホトケノザ、スズ菜（蕪のこと）スズシロ（大根のこと）ござを敷き新を二本組の前にし組板の前の新の上に火ばし包丁、お勝手道具を置き、スリコギや火ばしで拍子をとり乍ら七草唄を歌い七草をきざむ。

「七草なずな　唐土の鳥と日本の鳥と合せてばった〳〵」

これを餅粥の中に入れ塩少量入れたものを七草粥と云い、神棚に供えた後、朝食又は昼食とする。セリ、ゴギョウを多く入れたものは中々うまいものです。

10. 木花

この日初山で切った勝の木の細いもの十五センチ位に切り桑切鎌か小鉈で廻しながらけずり、木花を作り神棚の榊差と共に供える。

11. 十一日　初寄り合ひ

各戸一人必ず出て部落の一年間の規則行事を決定する。この規則行事はみだりに変更又は違反することは出来ない。とされています。

鏡びらき

神棚に供えた正月の「おそなえ鏡餅」を全部下げます。これを割って鉄器網で焼き「おしるこ」又は「あまざけ」に入れて食べます。正月家庭儀式のひとつです。

12. 十三日　餅搗

米粉を木鉢でねり、「大だんご」五六ケ「小だんご」沢さん、繭形、瓜形、茄子形、南瓜形、人参形、鳥形等作り蒸して初山に取った勝の木枝か栗の枝に差し、繭玉菓子を枝にかざり神棚に供える。

14. 子供等は歳の神の前でおんべ竹を中心に、大掃除に出た神仏具やお飾りをぐるぐる高く巻きつけ四方繩を張って夜番をします。

15. 十四日　どんど焼　（左義長）

番人の子供等は明け鳥、五時頃鳴くを待って飛び出し、「どんど焼だ、もつけるぞ、どんど焼だ、もつけるぞ。」と部落中を廻り、夜明けにおんべ竹のパンパンはねる音と共に天高く炎を上げる。書初めを持ち寄り高く舞い焚え上った者は字が上手になると云われました。どんど焼の火種で煙草を吸うと健康になると火種を持ち帰り親を喜ばしたりもするものでした。

16. 十五日正月　千百たわら

朝あづき粥を餅を入れて炊き、神棚に上げてある、勝の木の、四ッ割棒の割れ部に粥を充分につけ、屋敷内の柿の木、栗の木その他の果樹を割れた部分で歌いながら一本一本叩き廻る。

「千百たわらなろうと申せ、ならねぇとぶっきるぞう。」

「千百たわら　たきゃとけなるとからすがとるぞ　ひくいとけなると子供がとるぞ　中どけなれなれ　たあんとなれ」

この十文字四ッ割に大山さんの神札を差し千百俵棒は苗代の水口に差しておくものです。

正月子供の歳の神

正月二日氏神様のうしろに祀られている、木車の小さい祠を引き出し神官のお払いを受けて新繩ひもを長くつけ男の子供等全員で部落中戸毎に廻りひきあるく、「さいの神さんなむ神さん、子供の云うこと聞いとくんな」と子供等の願いごとを云ってひき廻り、各戸毎に頭数をおくんなと大声で、その家の老人から赤子までの人数の銭数を賽銭箱に入れてもらう。五人なら五厘が五つでも一銭が五つでも、二銭五厘が五ッでも金額ではなく人数分の頭数を賽銭として入れる。賽銭が入るまで歳の神はうごかず、子供等は、「歳の神さんなむ神さんを歌い続ける。五日の日宿を借りてこのお賽銭で、おかめ女、ひょっとこ、日の丸扇子等買い、菓子を買い宿の家で御馳走になり、余り金は残らなくても少しばかり余り金全部を宿のお礼として翌日歳の神を掃除して氏神うしろの元の位置におさめるのでした。

17. 七日　おんべえ

子供等は部落中で一番太く素状の良い孟宗竹を調べて歩きそれを当然の如く貰い受け笹をぎりぎり巻いて全員でかつぎ、二年生はつかまって歩くだけだが道路一ぱいにうねり「おんべえ、うんよう、がんよう。」とうねり歩き交通止めで家々の門口で掌をたたき、おんべを迎え見送ったものでした。このおんべえは歳の神の前で終り笹繩を解かれ、歳の神宿祭りに踊った扇子やおかめ女、ひょっとこを笹に

きれいに飾り、どんど焼の中心竹となったもので、大正初期まで続きました。

18. 十五日　青年お無尽講

当日は日守の神楽が朝早くから戸毎に廻り太刀を持ち各戸お払いをして大道芸等をして一日中村中夕方まで廻り歩いたが、青年は朝早く全員で太鼓を打ち鳴らし、切透しの山の神に参拝新入団員は弓の的引きをして祝盃を上げました。（このことは戦前迄続きました。）江戸時代は十五才で成人（元服）とし若衆入りの指導親分を作り、この親分から日常の礼儀、村の規約を守る指導を受けるのでした。

成人者と親分は紋付、羽織袴でお参りをして親分の指導を受け弓の的弓親子盃交はしをしたものです。その夜宿を借りて祝宴となりますが、その前に無尽講を開く。これは妻帯前には必ず伊勢参宮をする江戸時代のならわしで、大変な旅費がいる為、毎年無尽積立をして妻帯近き者から、無尽をとらせ参宮者の氏名発表をしたものです。成人となったものは山の仕事をしても良いとされ成人者の入団祝ですが今年は誰が当るかと大変なことでした。祝宴には部落区長さんと青年監督指導役を招待するのですが、入団の翌年の小若衆が招待のお便に行くのですが、この礼儀作法は親分が良く教え、弓張提灯に火をともして若衆団長の前に二人で折りたゝみ式提灯を前にして坐り、両手をつき「只今より区長様にお使いに参ります。今晩お無尽講で御ざいますから御時分時をみてござって戴きます。」と申し上げてきますと、区長宅に上り提灯を横にして口上を述べ帰り提灯を今度は消して折りたゝみ団長の前に出し坐して、「只今区長様宅のお使いから帰りました。」区長さんから云われた口上を述べるのですが学もない昔のことですから若衆親分は心配で口上が立派に述べられるか庭までついて行かれたそうです。今日でも山の神の参拝と祝宴があり、お無尽講と呼んでいますが、その歴史と意味は余りわかっていないようです。

19. 十七日花焼

二番正月に飾った「勝の木を廻しけづった木花と繭玉だんご花の木枝や正月に使った不用品を全部子供が集め歳の神前で焼きこれを花焼きと云います。

二十日正月

二十日正月目が覚めた。と云いこれで正月は全部終ります。奉公人の入替え、雇人をやめる者、新らしく雇われる者が主人に挨拶し新旧交代の日で、明日から本格的仕事に入りました。

柏谷　佐藤信義

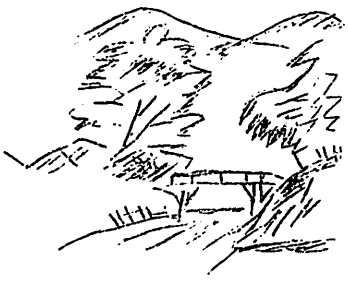
五反田トンネルの長吉さん

昔の東海道線は御殿場廻りで、私達伊豆者は土狩駅を三島駅と云って、そこから乗車する不便さでした。政府は国の繁栄の為、丹那トンネルを計画しました。始めから、当時の技術では難工事が予想されましたが、十七年の長い歳月をかけ昭和九年十二月やっと完成しました。今日ではその難工事も知らず、熱海に十分、東京に一、二時間で旅行とも思わず恩恵に浴していますが、この丹那トンネルを堀った為、私達函南住民は大変な被害をこうむりました。井戸水も川水も涸れてしまい、生活の水は勿論、田植の水もなく、村の有志の方々が何遍も鉄道省に交渉して補償金をもらい、色々な用水工事がされました。畑毛、柏谷、仁田の田んぼ用水を稲妻堰と云いますが、いろいろ工事をしても水は半分程で、仁田。柏谷の田植は出来ず、止むを得ず、五反田の大土肥境から、来光川の水をポンプ上げすることになり、川端から地下トンネルを堀ることになりました。トンネルと云っても人一人やっと膝を折って、通れる「とばみ堀」で現在の道路下を約五百メートル程一人の土工さんが堀り上げ、堀った土は小さな板車に掻き乗せ縄で引出す原始的法で完成させたそうです。これで柏谷、仁田の水田はうるおい稲穂が垂れるようにみのることになりましたが、このトンネルを五百メートル間一人で穴深くもぐり「とばみ堀」をした苦心は大変なことだったと思います。

このトンネルを堀った土工さんは上沢の長吉さんと云う方だそうですが、今はこの人を知る人もなく、仁田。柏谷の田んぼをうるおしています。

この工事の頃有名な「うどんげ」小説の作者九条武子夫人の言葉に「自分の生命を打ち込むことの出来る仕事をもつ者は幸福である。そこに如何なる苦難が押しよせても、たえざる感謝と新しき力のもとに生きて行くことが出来る。そしてその生命は仕事も共に不滅である。」と云われました。

上沢の長吉さんの、土工事業をそのまゝ言葉にされたような気がします。貴族出の九条武子貴婦人と一土工の上沢の長吉さん、誠実な言行一致を見出したような気がします。上沢の長吉さんの工事は九条武子貴婦人の言葉と共に永久に不滅の生命として、我が函南に残ることでしょう。



柏谷　佐藤信義

長池の大蛇飛び立つ

塚本　仁　菅　信　吾

長池とは、塚本区と肥田区との中間にあった大きな池で、その周辺に小さな池が三ッ四ッ存在していた。

昭和六年耕地整理事業で、現在は美田となり、西方の一角には「みのり幼稚園」が建設されている。この長池にはコイ。フナ。うなぎ。なまずと大きなカタ貝が生殖しており、春夏秋冬を問わず、つり糸をたらしている姿、また、夏休みに時季には多くの子供達がつり竿を持ってこの池に遊びに行った憩の場であった。

話題の大蛇が飛立つ？　とは、明治三十四、五年頃、この大きな長池を一度かい干しをして見ようと誰が言い出したのか、塚本。肥田両部落の農民が出て、この池のかい干しを始めた。理由は、つまびらかではないが、魚を取ることが目的のようであった。

今から八十年も前のこと、当時はかい干しの道具とて大した物もなく、総て人力で作業が進められたものと想像される。このかい干しを知った、池の主大蛇は、ひ干しになっては大変と心配していた矢先、その晩、幸か不幸か暴風雨となった。大蛇はこの時とばかりに長池を飛び立ち、箱根の芦の湖を目掛けて一目さんに飛び立ってしまった。丁度、この時「郡立の田方農林学校」（現在、県立田方農校）の建設が進められており、上棟式が挙行された翌朝、校舎西側のこびらが大きく破損されていた。その後、誰れ言うとなく、農林学校の建物破損は、長池から飛び立った大蛇の尾が校舎に当った為にこわされたと言い伝わっている。また、箱根の芦の湖には、現在も長池の主であった、大蛇が住んでいるだろうと伝わっている。

以　上

〃　遷宮に金のへび

塚本　仁　菅　信　吾

田方の杜（俗に森山と言っている）昔は、広い田圃の中央にポツリンと小塚の如くあり、海抜三十六メートル、面積八、一〇七平方米の小さな岩山である。この山頂に稲荷さんが鎮座、毎年、信者より大きな赤鳥井が奉納されている。

話題は、昭和三十二年のことである。終戦後十一、二年を経過した塚本区の世帯数は約一〇〇戸（昭和五十四年には約六〇〇戸）で経済的にも非常に苦しく、文化も遅れていた。当時、区の有力な役員さん達が計画した大きな事業が「水道」

であった。

塚本。肥田の中間、水田に水源を求め、この水を森山の頂上に上げ全家庭に供給することになった。水源タンクを設置する場所に稲荷さんがあるので、一時、稲荷さんの「ご神体」を森山の麓にある満宮神社に遷宮する事になった。当日、神官を招き役員一同参集し、静粛に式典が挙行され、神官が、「ご神体」に手を差し述べたものの、いつまでたってもご神体を持上げぬので、後にいた役員達は、神官は何をしているのだと思っていた矢先……「アッ」どなたの口から出たか、また、どの役員の目に映じたか、「小さな金のヘビ」がご神体の脇から飛び出し森の中へ消えて行った。

神官は、うやうやしく「ご神体」を手にし、役員一同これに続き、百余段の石段を下り満宮神社へ足を運ぶ。神官以下役員一同が間も無く百余段の石段を終ろうとした瞬間に先程の「金のヘビ」は行列を横切って、満宮神社の社殿に飛込み姿を消されたと云い伝えられている。水道工事が完了後は、稲荷さんも立派に改築され、「ご神体」も満宮神社より稲荷さんへ移されています。稲荷さんの「主」金のヘビも今は静かにご神体を見守っているものと思われます。

毎年「二月初午には、塚本区民多数がノボリを持って参詣しています。

以　上

肥付ケ石　二転三転

塚本　仁　菅　信　吾

この伝説は、秋山富南の「豆州誌」に曰く「この石に登れば、足は必ず浮腫す、ゆえに土を覆い小塚を誌しとす。」この石は、塚本区の西方字町田（水田）にあり、青黒色をしていた。しかるに、昭和三十三年九月狩野川台風により、町田の西方三百メートル地先の堤防決壊で一夜にして、塚本。肥田の耕地は泥海と化し、翌年、耕地復旧工事も進められ、工事完成後の耕地は従前の耕地と全く変った碁板の目のような立派な耕地となりました。

何百年来の伝説「肥付ケ石」も一夜にして姿を消してしまったと思われていた。この由緒ある石が耕地復旧工事中に堀り出され、換地後の字、伊豆山田（元、町田の地続き）の土手に露出されていたが、その後、何年経過、また、誰れが運んでくれたものや現在、塚本区の満宮神社の社殿前に放置されておるが、住民の殆んどがこの伝説を知らないでおられると思います。

筆者が、昭和五十一年一月函南町文化財を守る会の一員に選ばれたので、会長さんにお願いして、この謂れを立札に書

いてもらい、現在、この石の前に立ててあるが、広い境内の一隅に整然と安置しこれを土で覆い、町田にあった当時に復元し、周囲を柵で囲み、二転。三転はしたものゝ今後、永遠にこの伝説を後世に残したいと思っています。

興聖寺の襖絵

塚本　仁嘗信吾

天保（約一四〇年前）の頃だと言われている。塚本村・間宮村・肥田村の百姓達は、どことなく出没する大鹿に農作物を荒されて困っていた。とくに塚本村の被害が多かった。余りのことに名主・百姓達が相談して猟師を頼む。

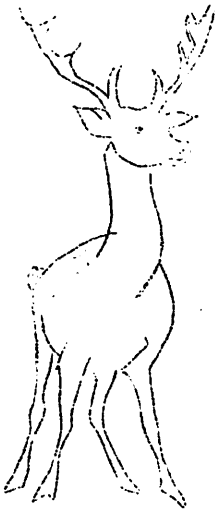
その日は、初秋の明月、頼まれた猟師の勘七は、愛用の種子島を手にして、狩野川べりの畑に身をかくしていた。半ときも待たないうちに、大鹿が現われた。勘七は、ねらいを定め種子島の引金を引いた。

硝煙をすかし大鹿のいた辺りを見ると月光に鹿のひづめの跡が入り乱れているのがハッキリと見えた。勘七を先頭に猟師一同は、ひづめの跡を追った。西耕地を真直に通り部落内へ入った。なおも追って行くと興聖寺の境内に入った。おかしいと思いながらもひづめの跡をたどると本堂の前で消えている。庫裡をたたいて住職を起し、本堂の中を見せてもらったが、大鹿の姿は見えない。猟師一同あきらめて庫裡の方へ行こうとして、ハッとした。大鹿がいたのだ。しかしよく見ると板戸に描かれた大鹿だった。なんだ絵の鹿だと思ったが、不思議なことに生々しい弾痕があり、今にも血が滴たりそうに見えた。

あくる日から、パッタリ大鹿は姿を見せず、百姓達はホッとした。誰れ言うとなく、「興聖寺板戸の鹿が抜け出して悪さをしたのだ。鉄砲で打たれたからもう悪さはしないだろう。」と言う話だ。

函南町文化財を守る会では、この襖絵を文化財に指定、永遠にこの伝説を後世に残す所存です。塚本へお越しの際、住職（三宅一道氏）に申し出て、ご覧下さい。

以　上



マリア観音（キリストの母）

塚本　仁　菅　信　吾

豊臣時代ならび徳川の鎖国時代は宗教に対し厳しい制裁、（島流し・打首）が加えられた。しかるに信者の信仰心は、今も昔も変りなく、幕府が厳しく取締ってもオキテの裏をくぐって信仰に燃えていた。

話題の「マリア観音」は塚本区の北側、大場川（昭和八年改修・堤防を作る）べりの笹藪の中にお堂が建られ、この中に安置され、周辺の人々は勿論、関東・西は神戸地先からも数多くの信者が訪ずれていた。明治時代に至り、信条の自由が認められたので、ヤソ教（キリスト）信者も身近に教会等を建設して、そこで信仰する事ができるようになったので、わざわざ遠い塚本まで足を運ぶ必要がなくなった。よって、その後、長い歳月の流れ、また幾度かの風水害に見舞われ、ついにこの「マリア観音」も野ざらしとなっていた。

この哀れな「マリア観音」を塚本村の小川宗右衛門さん、（初代、函南村町）が自己の菩提寺（現在の興聖寺）住職・日吉密道氏に依頼して本堂の一隅に安置させ、現在に至っている。小川家では、この「マリア観音」を「子安観音」と呼んでいる。小川家は子供に恵まれていなかったので、このマリヤさんが子供をかゝえている観音様である為、この観音様を信仰することによって、幸福な子宝を得られると信じたのだろう。

株良の松

塚本　仁　菅　信　吾

文明・文化の発展は誠に喜ばしいことであるが、その反面、名勝・古跡また、数々の重要文化財など次々とこの世から姿を消している。

塚本区と間宮区の四ツ街道の中間、田圃の真中に大きな一本松（樹令不詳）道行く人々に富士の眺めと同時にこの一本松が必らず映じた。しかるに、この一本松の雄姿も時代の波には勝てず、昭和四十年、国道一三六号線、下田バイパスがこの松の一〇〇メートル東を横断するや、この周辺は十カ年間ですっかり住家に包れ、昔の面影は今いづこと言えよう。

この松の由来は、源頼朝が韮山の蛭が小島で旗上げをされ、韮山から三島大社へ参拝され、当時、この地に第一鳥井が建られていたと言い伝えられている。この株良の松から三島大社まで四粁余の道のりがある。昔の神社・寺院の境内が如何に広大であったか驚くばかりです。

註。この一本松（株良とは地名をとらえた）も昭和五年の大暴風雨で横倒しとなったが、塚本区内に住む○○さんの奇特で当時、塩（叺入れ）何俵と職人を雇い、倒れた老木を起し、三本の大きな檜丸太にささえられ、遂い、枯死することなく今日に至っている。なお、昭和五十年頃より周辺の名木が次々と松食い虫に荒され、この世から姿を消している。

株良の松よ、どうか松食い虫に荒されることなく、頑張ってもらいたい。

大土肥の狂歌師

大正時代の柏谷の古老達の話に、江戸末期に大土肥に八衛門と云う狂歌師がいた。何家の人か久保田薫さんに寺の住職と、過去帳を調べて見てもらったが、該当者はないが江戸末期に西浦の人が寺男として寺の近くに住み非常に学もあり、詩歌を楽しんだ人がいたと云う説がありその人のことを、八さんと呼んでいたと云う。

八衛門の狂歌数題を記してみよう。

その一

昔柏谷の養源寺で大平村三部一部落の踊人をたのみ村芝居をかけた。三部一部落は「すげ笠」の名産地である。芝居道具は西浦の「古宇」部落の立派な舞台道具を借りて行われた。見物に来た八衛門さんは速坐に狂歌として芝居幕間の見物集を爆笑させた。

「三分一、四分一、までは、古宇のもの
すがたくずせば、もとのすげがさ」

その二

柏谷の三番組は「寺尾組」と云う。この寺尾組が雨のどしゃぶりに大火となった。八衛門さんは消火応援にきて大いに奮闘してくれ鎮火した。やっと鎮火すると八衛門さん安心して、つい狂歌が口走ってしまった。

「照ろうてろうと思っていたら
降るに焼けるがこれはお柏谷」

この時かたわらに居た柏谷の清兵衛と云う、有名な荒男が怒り、「この野郎、この火事場にきて、「降るに焼けるがこれがお柏谷」とはふざけたことを云う奴だ。」と、八衛門さんをける、なぐる、さんざんに、ひっぱたいた。八衛門さんは、打たれながら又一句できた。

「たたきぬかれた八衛も柿
渋がぬけるか腰がぬけるか」

そこで仲裁が入り八衛門さんじゃ仕方ないよやめろやめろと引分け荒男柏谷の清兵衛の敗けだと清兵衛は笑い者にされた。

その三

大土肥坂の昔は、現在の白十字会社上から岐れ道あたりまで細い道の切透しで大木が上に繁り両側から天を覆い昼も薄暗い所で雨上り晴れても天暗く赤粘土道で二日も三日も道は溺れつるつる滑る、難儀な道であった。こんな状態は大正時代まで続いた。江戸時代、初秋になると、お代官のお検見と云って、江川代官自からその年の稲の出来具合を調べ無理な納税米のないように目ききの従者五人を連れ各村々を調査し歩いた。代官江川公は質実剛健自からを戒しめ、日常の服装は百姓と変わらぬ質素さで「ズボン」の膝が切れても「あて布」をし又切れても「あて布の上にあて布」をして神楽獅子の頭の髪のようで庶民はこれをお代官の「かぐらももひき」と云いその質素さを尊敬していた。代官は大土肥のお検見を終り次は柏谷えと大土肥坂を登る途中であった。八衛門は素足で下肥（うんこ）を天秤でギチョ〳〵と威勢よく前を行く、五、六人集に「御免よ。」と声をかけたとき、代官様と気付き、はっと、びっくりして、足を滑らせ、（うんこ）と共にひっくりかえってしまった。大便は遠慮もなく代官の「かぐらももひき」に飛散って黄金の花を咲かせてしまった。八衛門は二度びっくり、流れる道の（うんこ）の上に両手をつき、大便上に頭をすりつけ、あやまり言葉も口を出ず。

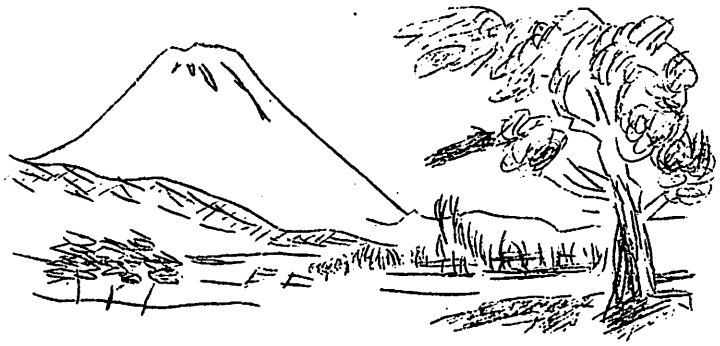
「お代官のかぐらももひき金に染め」

八衛も二十重に頭金染む」

と大声で歌い、どうぞお手打ちをと（首を切って下さいのこと）初めてあやまった。

代官江川坦庵も従者も八衛門の度胸とこの狂歌に感たんして大変なおほめの言葉があり、桶の破損修理代金と、おほめの賞金まで与えられたと云われる。

柏谷　佐藤信義



『伝説』

「おまつば」の由来

畑毛　久保田　陽　太

今は、おまつば、といわれているが、昔はおまとばと云っていた。その由来は、畑毛に現在ある西原家は、武家であった。弓を射る場所があって、当時頼朝が、蛭ヵ小島から局の修行に時々来ていた。西原家に美人で、お花さんがいてお茶のとりもちをしていた。頼朝は、大変気に入り、嫁にと申し込んだところ、お花さん曰く、塚本の小川家にいいなづけがいる、との理由で断った。頼朝はあきらめず、いいなづけを殺せば自分のものになると思い、奈古谷の文覚上人に相談したが、文覚上人は、自分の前身もりとう時代、袈裟御前に思いをかけ、ついに死にいたらしめたいきさつを語り、固く戒めたという。

「愛馬池月」の由来

畑毛　久保田　陽　太

頼朝が、小田原へ行くため、畑毛の谷下を通る時、大きな石の上で弁当を食べたので、その岩を「めしくい岩」となづく。その時、山の向うの石が、よだれを出したという。（石に白い筋がある）この石を「よだれ石」という。

谷下を過ぎると、道端に「雨乞い岩」がある。この岩に貯った水を飲めば雨が降るという、いわれがあった。それを馬が飲みほしたので「びんだらい石」という。畑に出た。池の山に白い馬がいた。頼朝は、この馬を求め「池月」号と命名愛馬とした。

大蛇が汽車になった話

平井　岩崎　木公

丹那トンネルの函南口あたりは、元平井の区有地で、鉄道工事の始まる以前は、原野で雑木が茂っておりました。私が子供の頃は葛葉蔓がむらがったり、グミの木の大きな株が幾つもあったり、あけびの蔓が雑木に這い登ったりしており、先輩に連れられてグミや、あけびを沢山採ったことを記憶して居ります。

明治の中頃のことですが、その辺に大蛇がすんでいるとい

う噂がありました。大竹の某がこれを見てびっくりして家に帰り、数日口もきけずに寝込んだり、田方方面の某が奴田場山へ行く途中、そこで大蛇が大きな口を開き、赤い舌を出しながら、音を立てて葛薬葽のなびき茂っている上を、物すごい早さで走るのを見て、急いで引き返し、無我夢中で走り、上沢の入り口に来てとうとう腰を抜かしてしまいました。このことが広く知れ、村中大騒ぎとなりました。平井の人達は、これを生けどる話が持ち上り、威勢のよい連中が、いよいよこれを決行することになりました。

大名竹で大きなモジリを作り、餌として鶏二羽をモジリの中につるし、字中お祭り騒ぎの中を意気揚々として現場へ行きました。それらしい所を選び、そこへ道具を仕掛けました。

翌くる朝一同勢揃いして現場へ行って見ましたが、モジリの中には大蛇も居らず、餌の鶏もありません。一同不思議に思いましたが、恐らく大蛇に魔力があり、餌を只取りされたであろうと話し合い、生けどれば大金もうけになるとの目算も外れ、すっかり意気消沈して、しおしおとして帰りました。

実は、その連中の中で嘉六、太平、彦作という者等が、前日仕掛けた後で、夕方こっそりと現場に戻り、鶏を外して持帰えり、その晩彦作宅で鶏を酒の肴にして大きげんになったとのことでした。それから大蛇も人間達の悪知恵に驚いたのか姿を一向現わさなくなり、いつの間にかこの話も絶えました。

数十年を経た大正の初期、丹那トンネルの掘削がはじまり、昭和の初期完成され、函南駅が設けられ、一日中幾多の人を呑吐し、大蛇ならぬ列車が幾千人の人々を腹中に納め、蛇穴ならぬ丹那トンネルを警笛を鳴らしながら日に何回となく出入して居ります。

大蛇も人間の知恵に、いよいよたまげ苦笑していることでしょう。誰呼ぶともなく今では、そこが蛇洞といって地名として残っており、トンネル口となっています。

きつね塚

刀去人

長伏の伯父さんのところで話が思いのほか長引いてしまい、平井村の弥右衛門は、夕暮の道を急ぎ足で歩いていた。この季節によく吹きまくる西風が、今日はばったりと止んだのは有難いが、日は、すでに徳倉山の下へ沈み、空は残照に映えひとしお寒さが身にしむ思いだった。

大土肥坂へかゝった頃は、大木の下の道はもう暗い。この辺は、狐塚と言われており、追いはぎが出たとか、狐に化された者がいるとかいう話を思い出し、弥右衛門は、ひとしお

足を早めた。

道が坂を上りつめると、道が残の夕映えでまたハッキリと見えて来たのでホッとした時だった。十間ほど先でひとりの男が、しきりと探しものでもしているように、あたりを見回している。近ずいてみると柏谷村の清作じいさんだった。

「清作じいさんじゃねえか。何をしているだね。何か落したのかね。さがし物なら早くしねえと日が暮れちまうに。」

「おお、平井の弥右衛門かよ。わしゃキセルを落しちまったもんでよ。さっきからさがしこまいているだが、どうもめっからねえんだよ。」

「そうかね、それじゃ、おらも一しょにめっかえてやるべえ」

と言いながら、見るともなく清作じいさんの方を見ると、右手に何かしっかりと握りしめている。近よってよく見るとキセルを握っているではないか。

「おい、清作じいさんよ、あんた、落したちうキセルは、まさか、右手に握っているのとは、違うずらなあ。」

「ええっ。」と清作じいさん、自分の右手を見ると、

「ひゃー　これだよ、これだよ、わしゃなんだってさっきから、さがしこましたずら。おかしなことがあるもんだなあ。」

「こりゃ、お狐さんに化かされたずら。暗くなんねえうちに早く帰んべえ。じいさん気いつけてな。」

清作じいさんと別れた弥右衛門は、狐塚の方をこわごわ見ていたが、慌てゝ振り向くと飛ぶように家へ向った。

日守の男坂。女坂

江間小四郎義時（北条義時）がある時、子どもの安千代丸を連れて魚つりに行った。ところが、この池に雌雄二匹の大蛇が住んでおり安千代丸を一呑みにしてしまった。義時は、愛児の仇を討とうと家臣を率いて池を囲み、池中の蛇を退治しようとした。幾百もの矢を池中に討込むと、水面が俄かに盛り上ると思う間に、二匹の大蛇が池から躍り上ると、日守の坂を越えて浮島ケ原へ逃げてしまった。この時、雄蛇の通った坂を男坂、雌蛇が通った坂を女坂と言う。

雨乞いの池

間宮の天池は、さしわたし十米位の円形の池ですが、底無しの深さがあると言われています。古老の話では、今までに数人の人がこの底無しに足を取られて死んでいますが、決して死体が上って来ないそうです。

この池の水は、どんなひどい「日照り」でも決してかれる

ことがないと言われています。

「日照り」つゞきで、雨が欲しい時は、この池の上に鐘をかけて、撞き鳴らしながら降雨を祈ると、必ず雨が降ったものだそうで、昔から「雨乞いの池」とも言われています。又、瘧に悩む人が、この池に祈ると必ず治るとも言われています。

実ならずの椎の木

刀去人

旗上げ前の頼朝の蛭ケ小島での配流生活は、比較的自由であった丈に、血気盛りの彼にとって却って退屈な毎日だったに違いない。軽井沢方面に狩に来たとか、三島大社へ源氏再興の祈願に通ったとか言われているが、そんなことで退屈をまぎらしていたのかも知れない。

そんな或る日、彼は、桑原の舟山にある深谷山新光寺奥院（現在の高源寺）へ遊びに来た。秋とは言え快晴に恵まれたその日は、昼すぎには夏を思わすような暑さだった。涼しい椎の木の木影を見つけた頼朝は、休んでいるうちに思わず快い眠りに入っていた。

源氏再興の夢でも見ていたのかも知れない頼朝の頭に、椎の実が落ちて当った。

快よい眠から目覚めた頼朝は、不きげんな眼ざしで木を見上げていたが、

「心ない椎の木よ、下に眠る旅人の楽しい夢を再び破らぬ為に、これからは、実をつけるな。」

と、椎の木に向って叫んだ。

それから、この椎の木は、実を結ばなくなってしまった。

真梨洞の怪

刀去人

真梨の洞というのをご存知でしょか。丹那トンネルの大竹口の向って左側にびんの沢と双田場両台地の間に、深く長く伸びている洞です。この洞は上の方には、川の流れがあるのに、下の方に来ると次第に水がなくなりから沢になってしまうので昔は、尻無川と言われていましたが、それがなまって真梨と言われるようになりました。

大正七年、丹那トンネル大竹口の工事が始まった頃、西口工事担当の鹿島組の飯場に関口という組頭がいました。初茸の取れる頃、山へきのこでも取ろうと思い真梨の洞を登り始めました。道といっても当時は、草の中のふみ跡程度のところですから、四、五丁も歩くと暑くなったので、先ず一服と、

道端の手頃な岩に腰をおろしました。

きのこを取りに来たと言っても、実は、組の者が沢山初茸をとったという話を小耳にはさんで出かけて来たので、あてがあったわけではありませんが、初茸は、小松林の下にあるという事は、知っていたので煙草をふかしながら、小松林はないものかと見回していました。

その時でした。近くの大きな岩の方で聞きなれない草ずれの音がするのが耳に入りました。かなり大きな物が動いている気配に、思わず腰を上げると、今まで腰をおろしていた岩に、身をかくすようにして、音のした方の大岩の方を見ました。僅かの間だったのかもしれませんが、草ずれの音が消えポッカリと穴があいたような一時は、只自分の心臓の鼓動だけがドキンドキンと耳につく、バカに長く感じる時間でした。

次の瞬間、大岩の上にゆるりと伸び出した蛇の頭、その緑色の燐光のような眼を見た時関口は、頭のテッペンから、足の裏まで寒気が電流のように突き抜けるのを感じました。

五町の道の長かったこと。下り道を石でも転がすように一息で駆け込むなり、「蛇だ。」と叫んで寝込んでしまいました。一週間も高熱にうなされ、ねこんだ関口が後で話したのを聞くと、頭の大きさが五寸程の大蛇だったと言うことですが、恐しさの余り大きく見えたのでしょう。でも他にもこの大蛇を見た人がいるということですから、かなり大きな蛇が真梨の洞にいたことは事実のようです。

名馬池月

「宇治川の合戦」と言えば、元暦元年一月（一一八四）の源義経。範頼連合軍と木曾義仲軍の間に戦われたものと、承久三年（一二二一）いわゆる承久の乱の時、朝廷軍と北条泰時の幕府軍との間で戦われたのと二度ある。

しかし、昔の国史を小学校で習ったものには、前の宇治川の合戦の方が印象に多く残っている。それは、義経軍中の佐々木高綱、梶原景季両名が、頼朝から与えられた名馬池好（生　池月）磨墨に乗って先陣争いをした「宇治川の先陣争い」を思い浮かべるからである。この名馬について伝説があるので簡単に紹介してみよう。

畑の小字に「谷戸」というのがあるが、ここは通称「円通寺洞」ともいう。古老の話によると、昔ここに円通寺というお寺があった。この寺で一頭の馬を飼っていたが、成長するにつれて、恐ろしく気の荒い馬になり、手に追えなくなったので放してしまった。

放された馬は、寺の裏山の密林に入り野馬となり、林の奥の「血松の小池」の近くを住む場所としていた。その頃、源

頼朝が、一日名馬磨墨に乗り軽井沢の駒形観音に参詣する途中にこの辺りを通りかゝった。今まで黙々と歩いていた磨墨は、ここへ来ると急に立ち止まったかと思うと、何かを呼ぶように一声高くいななないた。すると林の奥から、まるでこだまのように馬のいななきが返って来た。

頼朝がこの声に誘われるように、声のする方に馬を進めると、木の間がくれに毛並みの美しい馬が見える。

「うん、これは素晴らしい馬だ。なんとか捕えたいものだ。」

と、頼朝は、伴の者に命じて山狩りをして生捕りさせたが、池の傍にいたので「池好」と名付けた。

大正元年発行の村誌に、丹那川口家に伝わっていたという「池好のくつわ」の図が載っている。

妻

軽井沢　沢里　散位

伸助は、軽井沢村の百姓であるが、由緒ある家柄の生れである。父親は、伸助の幼少の頃から折をみては、聖賢の道を教えて育てたのであった。伸助の妻は、登美といい相模の土肥の郷の生れであった。父母が亡くなって二人だけの生活になると、もともと裕福でなかった上に、伸助が余り生産にあくせくしない性格だったので、数年のうちに村でも有名な貧乏家になってしまった。それは、大変な貧乏で、その日の糧にもこと欠く事さえ度々であった。それでも登美は、ぐち一つこぼさず伸助によく仕え、夫婦仲はいたって良かった。しかし、余りにもひどい貧乏に耐えかねてか、或る日のこと、妻の登美が、

「あなた、しかたがないから泥棒をしなさいよ。」と言った。

でも、伸助は、幼い時から父より教えられた聖賢の教えを思い出して、こう言うのであった。

「人間として貧乏したからとて家名を辱かしめるようなことをしたとあっては、先祖に対して申し訳けないことである。」

すると妻は、怒って言った。

「先祖や家名のことを気にする位なら、もっと働きなさいよ。この世の中に働かないで食っていける道は、二つしかないんですよ。あんたが泥棒ができないならば、わたしが売春婦になるばかりですよ。」

伸助は、怒って登美と口喧嘩をして寝てしまった。しかし、仲々眠られぬままに伸助は考えた。男として一家を立て妻を娶りながら三度の食事にこと欠く有様で、妻に売春婦をしようと思わせる位ならば、いつそのこと泥棒をしようかと思ったが、それは、幼時からの父の教訓を思い出して決心することは出来なかった。又、妻の女のすべてを知っている伸助に

は、登美を売春婦にすることなど、とうてい出来ないことである。考えれば考える程自分が情なくなって来た。それでついに死のうと決心したのであった。

伸助は、こっそり起きて納屋から手頃な縄を持って、死場所を求めて村はずれの方にあゆんで行った。田舎の夜は暗かった。ここは、どこだろうか。死を決心した伸助には、西も東もなかった。全く方位の感覚をそう失したままあてどもなくあゆんで来たのである。

仏か神を祀ったお堂の裏のような処らしい。やがてのことに恰好のいいらしい枝に縄をかけて、一気に死のうとした時である。妻の登美の顔が大きく目の前に浮んで来て、

「あんた、死んじゃだめですよ。」

と言っているようであった。だが、同時に一切を思い切った伸助は、

幻術

軽井沢　渡辺宗正

文祿の或る年伊豆国軽井沢村の定光寺に一人の異相の男がいた。寺は、先頃の豊臣氏と小田原の北条氏との合戦で住職の僧が逃亡してしまったので、その後は無住である。その定光寺に近頃一人の男が住んで居るのである。その男は、どこか日本人ばなれのした顔立で年令は推定しかねるのであった。勿論姓名・生国等は一切不明である。

その年の春軽井沢村附近は、大雪が降った。その頃から住み初めたらしい。夏が過ぎて、国見石（軽井沢の古老は、十国峠をこう呼ぶ）には、すゝきの穂が見え初めて来た。最近村人の間に変な噂が立って居た。それは、彼の定光寺に居る男のことであった。噂は、定光寺に居る異相の男は、実は異国人で幻術使いらしいということであった。

その頃軽井沢に佐竹右京と名のる浪人者が妻と二人で住んで居た。妻は清江といって美しい女であったが子供は無かった。右京は、村人の噂には余り耳を貸さず、かえってその男を軽蔑する素振りさえ見せて居た。そんなことが何時か定光寺に居る男に知られたらしく、或るよく晴れた日の朝、右京の家に定光寺の異相の男が、おとずれて来たのだった。

妻の清江に茶の用意をいいつけてから、その男と対座して、その人の顔を見ると、なる程異相の人であった。顔は、老人のようでもあり若者のようでもあり一寸つかみどころのない輪廓である。眼は、ねむそうに見えるが、よく見ていると刺すような鋭い時もあった。瞳の色は茶勝った色をして居る。右京は、無言のままその顔を見て居たが、ふと何かおもい立って裏へ出た。すると思いがけなく一人の女に出会った。軽井沢や田代村ではついぞ見たことのない大変綺麗な女であったので、つい後をつけて見る気になった。行くと、山の谷合いに女の家があった。

「はて、こんな所に人が住んで居ったかな。」と考えて居たが、美しい女がしきりに招くので家へ入って行った。

女は、美奈という名で、一人暮らしであった。四方山の話に花をさかして居る内に日が暮れてしまった。こうなると男は弱い。乞われるままに一泊して、ついに夫婦の契を結んでしまった。一年たつと子供ができた。

「とうとう子供迄つくってしまった。」

右京は、ふと後悔めいた考えもしない訳でもなかったが、妻清江との仲に子供が出来なかったこともあって、すぐに諦めてしまった。

そのうちにまた一人子供が出来た。「これではもう帰れやしない。」右京は、家のことや妻の清江のことを忘れるともなく忘れて、いつか五年経った。

するとある日、山から戻って来ると美奈や子供達の姿が見えず、一通の置手紙があった。

私は、西国辺の生れの者だが、親のきめた縁談を嫌って小田原辺にあるという知辺を頼って行く途中、ここに住んで貰方に会ったのであるが、今日突然国の父が尋ねて来て生国につれもどされることとなった。子供は、貴男の形見に頂いて行くが立派に育てるから安心を乞う。最後に貴男のことは一生忘れないつもりである。との意味の文面であった。

右京は、哀しかった。心から愛し合って子供迄もうけた仲でありながら、何ということだ。こんなことがあってもいいものだろうか。はてはいいしれぬ腹立ちさも覚える。女の薄情がうらめしかった。だが、しょせん男女の仲なんて、一方がその気になれば、一方がどんなに思っても、秋風に吹かれてちりぢりになって流れて行く峯の雲のように別れなければならないものか、右京は、秋空に向って大声で美奈を呼んで見た。しかし答えるものは谺だけであった。

右京は、はかない気持になって、美奈との愛の巣を出ると、とぼとぼと歩き出した。しばらくして、ふとあたりを見ると、見覚えのある景色であることに気付いた。そうだ、五年前迄妻の清江と暮して居た軽井沢村だ。右京は懐かしかった。まず妻のことを思った。清江はその後どうしたろうか、無事だ

ろうか、それとも再婚でも？　右京は淋しい気持になったが、自分の勝手な行為を思うと愧しかった。と、いつか家出した自分の家の前に出た。見ると家出した時と少しも変った様子もない。不思議なことがあるものと、右京は、ぼんやり突立って居ると、窓から妻の清江が顔を出して、

「貴男、なにして居りました。早くしないとお茶がさめてしまいますよ。」と呼んで居る。

右京は、はっとした。そして自分が幻術にかかって居たことを知った。

追記

異相の人は、その日から定光寺より姿を消した。その後箱根湯本の早雲寺にそれらしい人が居るとの噂もあったが、ついぞ行方はしれなかった。早雲寺に居るようでは、北条氏にゆかりの者であったかもしれないが、軽井沢の古老連のいい伝えでは、果心居士だとのことである。

佐竹右京と妻清江の墓は、明治の初め頃迄、定光寺跡附近にあったのだが、新しい墓地が出来た時、どこかの墓にまぎれて今は定かでない。

定光寺は、今は廃寺となって、軽井沢の区民だけが、そこを「定光」といって居るだけである。

興聖寺の大鹿

軽井沢　沢里散位

天保の頃のことだが、定かでない。もっと昔かも知れない。豆州塚本村に、最近大鹿が出没して農作物をあらし、間宮村や肥田村の百姓達迄も大変こまっていた。大鹿はどこに塒があるのか、だれも見た者がなかった。たまに後を追ったりすると、その大きな角を振り立て向って来るので皆恐れをなして、大鹿の姿を見ると遠くの方へ逃げるばかりであった。特に塚本村では、夜になると、家の外に出る者もないありさまであった。それをいゝ事のように大鹿は、毎夜のように畑作をあらしまわって居た。余りの事に、名主や百姓代等が相談して猟師を頼んで鉄砲で撃ってもらうこととした。

その日は初秋の月のいゝ夜であった。猟師の勘七が鉄砲を持って狩野川べりの畑で待伏て居ると、案にたがわず、大鹿が現れた。勘七は矢頃を定めて種子ケ島をはなった。玉煙をすかして見ると、手答がたしかにあった。大鹿の居た処に来て見ると、月光にしるく、鹿の蹄のあとが入乱れ、べっとりと血糊を引いて居る。

一同は、鹿の蹄のあとを追った。西耕地を突切って村内に入って居る。尚も追って行くと興聖寺の境内につゞいて居る。

境内のあちこちを探して見たが、鹿の姿はなく蹄のあとは本堂の前で消えて居た。一同は不思議に思って住持の和尚に頼んで本堂の中を見せてもらうことにした。しかし、本堂の内部にも鹿はいなかった。探しあぐんで、一同が庫裡の方に入って行こうとしてはっとした。大鹿が居たのである。驚いてよくよく見ると、それは、板戸に書れた大鹿であった。それも急所になまなましい鉄砲創があり、今にも血がしたたるかのようであった。

一同は、狐につままれたような顔をして寺から出た。しかし、不思議といえば、そのあくる日から大鹿の姿が塚本や肥田に現われなくなったことである。そして誰いうともなく、「興聖寺の板戸の鹿が、いままで抜け出していたずらをしていたのだう。それが勘七に鉄砲で撃れたので、今はおらなくなったのだ。」という話が、塚本村に広まった。

力くらべ

軽井沢　渡辺宗正

軽井沢村の百姓常さんこと常吉さんは、些細なことから、馬と力くらべをすることになってしまった。ことのおこりはこうである。常さんは、つね日頃から畑村の馬喰の三次が嫌いであった。それが、今日、三次が常さんとこへ来て朝から執拗に常さんの馬と馬喰しようと談込むのであった。日頃から少々虫のすかない対手に、変にねばられるので頭に来た常さんは、つい

「おれと力くらべして馬が勝ったら馬喰してもいい。」といってしまった。いってしまって「これは、大変なことを約束してしまった。」と思って少々消気てしまった。

一方、三次は思惑ない常さんの言葉に浮々した素振りで、裏庭に繋いだ黒馬の方に行くのであった。力くらべの方法は、常さんが、やしょ馬ーやせ馬とも云うーに背負っただけ、三次の馬が荷鞍で運搬すれば馬の勝とするきめであった。これでは、誰が考えたって常さんの勝目はなさそうである。でも、常さんは、仲々の背負力のある男であった。玄米二俵は軽く、やしょ馬で背負ふことが出来た。馬喰の三次も、すぐに荷鞍を借りて、黒馬に着けると荷縄取りもあざやかに、米俵を二俵背負せると、それ見たかといふような顔で常さんの方を見やった。

「勝負は、まだまだこれからだ。」常さんは裏庭続の方を眺めながらそういった。その時、突然ある考えが常さんに浮んだ。「そうだ。」と、うなづくと常さんは、やしょ馬で米俵二俵背負うと、静かに庭続きのうなったー耕したーばかりの畑に入って行った。畑の向う迄行くと、常さんは、三次に、

「馬に荷を積んだまゝこゝ迄こい。」というのであった。

三次が、馬を引いて畑に入った。すると黒馬が片足ふみ込むと同時に荷鞍がひっくり返ってしまった。うないたての畑は、地面がやわらかいので、馬の足がめり込んで空の荷鞍だけでも、背中にのせているのは到底不可能なことであった。

勝負は、きまった。

「べら棒目、こんなましょくにあわない力くらべってあるもんか。」馬喰の三次は、黒馬の手綱を、やけにひっちうびくと、きゃどうを丹那村の方へ行ってしまった。

ー民話ー

きつね

軽井沢　沢里　散位

平井村の元さんこと元右衛門は、があばち（我意のにと）の強い人であった。ある日久しぶりに雨が降ったので、気の合った同志で寄合ってお茶をのみながら四方山の話に花を咲かせていた。その時だれかが「近頃上沢耕地に、きつねがいてよく人をだますそうだ。」と言い出して、平井村や上沢村のだれかれが、ばかされた話をするのであった。それらのばかされたという人達のなかには、日ごろ大変真面目くさったふりをして居る人もあったので、話は一層面白おかしくもてはやされるのであった。だが、元さん一人はみんなの話相手にならず、苦虫をかみつぶしたような顔をして「世の中に人間が、きつねにばかされるなんて、ばかなことがあるわけがない。」というのであった。

一座のみんなは元さんのがあばちの強いのをよく知って居るので、あんまり逆らわずにその日は解散したのであった。それから程なくした秋の終りごろである一時は、韮山さん（江川太郎左衛門をさす）が死亡する少し前だったので嘉永か安政のころであろうか一。

元さんは、三島宿へ用たしに行って帰りがおそくなって上沢耕地にさしかゝったのであった。細い真直な道の両側には取入れをすませた田んぼが続いて居る。道の中程まで来た頃であったろうか。見ると夜目にもはっきりと一人の女が見える。「はて、今ごろこんな処に女が居るとは。」と元さんがいぶかりながら、よく見るとそれはなかなかの美人である。元さんが平井村や上沢村や大場辺でついぞ見かけたことのない大へんあかぬけした年増である。見て居ると女は元さんの慾情をそゝるような風情を示しながら、つとかたわらの田んぼの中の稲むらの陰に消えてしまった。

「ふーん。」元さんは大きく息をすると「これは思いもかけ

ない都合のいゝことだ。」とつぶやきながらいなむらの方へ近よって行くのだった。だが、そのとき元さんは、ふと先ごろの雨降りの日にきいた友達のことばを思い出した。

「上沢耕地にはきつねが居てよく人をだますそうだ。」

「ことによるとあの女が、きつねだかもしれない。」そう思いかえすと、元さんは、いなむらの一歩手前で立止まると、

「よし、そうだとすると、きつねの野郎、次にはきっとかわったかっこうで出てくるに違いない。その時はかならずとつかまえてくれよう。そうして友達等にきつねが人間をだますことなんか、うそであることをみせつけてくれよう。」と心にきめたのであった。そして、夜のふけるのも忘れて、いなむらのかげから、きつねの出てくるのを待って居るのだった。

やがて、何刻かたって東の空がしらみかけたが、いなむらのかげからは、何も出てこないので、待ちきれなくなって元さんは、きつねが出てこないので、いつまで待っても、いなむらのかげに入って見たが、いなむらのかげには、きつねどころか、鼠一匹いなかった。「こんなはずはない。きつねの奴めどこへ行ったかな」元さんは一生懸命で、いなむらのあちこちをさがしまわるのであった。その時、「元さん」と、だれかが元さんの肩をたゝくのではっとして振返って見ると、近所の若衆達が二、三人にやにや笑いながら立て居る。ゆんべ三島宿で女郎買をして朝帰りだとのことである。元さんは、若衆の手前、きつねにだまされたとも言えないのできれいな若後家がその辺のいなむらにかげに居るらしいというと、

「それが、きつねだよ。」といって、若衆達は大きな声で笑うのであった。

幕末ごろの話である。

柱時計

刀去人

「おとうさんがまだ、中学生の頃のことだから昭和十年ごろのことだと思う。この頃は、夏休みになると大竹のうちへ来て、沼津へ毎日のように海水浴に出かけたものだ。その年は、八月になってから雨の日がなくて全く暑い夏だった。

ある日のこと海水浴にも飽きたので、珍らしく勉強をしていたのだが、午後になるとあんまり暑いので、我慢ができなくなり、川で水浴びをしようと思いうちを出たんだ。

連日の日照りで道は、真白くほこりっぽくなっているし、おまけに一番暑い時間だから、道を歩いている人もいないし、広い田んぼを見渡しても人影一つ見えないんだ。

早く川へ飛びこみたいなあと、思いながら足を早めたんだが、ふと、上の方を見ると桑原の方から下ってくるらしい人影を見ておどろいたんだ。」

「なんで、おどろいたの。」

「だって、さっきも言ったように、ものすごく暑かったから、何か特別急ぎの用かなんかなくちゃ道を通る人は無いと思ったからさ。」

「ふーん。」

「よく見ると何か大切そうに背負っているらしい。この暑いのに一体全体何を背負ってんだろう。暑いことを忘れて、その人が近づくのを立止まって見ていた。」

「その人何を背負っていたの。？」

「それがね、近づいてよく見たら柱時計だったんだ。」

「柱時計？それじゃ時計屋さんへ直しに行くんだったんじゃない。」

「おとうさんもそう思ったか、そのまゝ川へ泳ぎに行ったんだよ。」

「なーんだ。それだけの話。」

「いや、実は、この後が愉快なんだ。夕方になって、三島へ遊びに行こうと思って函南駅へ行ったんだ。すると顔見知りの駅員のKさんが、いやあ、今日は、実に面白いことがあったよって言うんだ。」

「一体、何がそんなに面白かったんですか。」

「うん、それあんたSさんを知ってるだろう。あのSさんが、暑い盛りに柱時計をかついで来たんだ。」

「なんだい、時計を直しに三島へ行くのかい。下りは出たばかりで一時間以上間があるぜ。」

「いや、時計が止まったので、時間を合わせに来たんだ。なんてたって、道の時間は日本一正確だから、駅の時計に合わせれば、間違いないと思ってさ。」

「折角合わせたって、振子が途中で止まるからだめだろうって言ったんだが、Sさん大真面目な顔で、時計を合わせると、大切そうに時計を立てたまゝ、かゝえて帰って行ったよ。」

おとうさんは、Kさんの話を聞いて、昼間Sさんが暑い道を柱時計を背負って歩いていた姿を思い出しておかしくって弱ったよ。」

慶音寺の大黒さん

仁田高楠寿男

むかしむかし、奈古谷のお寺から大黒さんを盗み出した泥棒がありました。車に積んで三島の方へ売りに行くため仁田

の慶音寺の前迄来ると、車は急に動かなくなってしまいました。泥棒は大汗をかいて車を引っ張りましたが、どうしても動きません。あきらめた泥棒は大黒さんを慶音寺の門前に置いたまゝ逃げてしまいました。

寺の門前に置いてある大黒さんを見つけた慶音寺の人達は驚いてどこの大黒さんか方々のお寺に問合せたところ奈古谷のお寺のものとわかりましたので、受取りに来てもらいました。ところが大黒さんは受取りに来た人達が持ち帰ろうとしても動きません。

大黒さんはきっとこのお寺に居たいのだろうと慶音寺へ安置して、奈古谷の人達は帰ってゆきました。

慶音寺にある大黒さんは、運慶の作と云われています。

猩になった上人さん

軽井沢　渡辺宗正

丹那村の新山の和助さんは、となり村の軽井沢へ道をいそいで居た。今日は軽井沢の毘沙門堂で藤沢の遊行寺の上人さんのありがたいお説教をきくためにでかけたのである。丹那村と軽井沢村の境の大橋を渡って急な坂道を昇って軽井沢村に入るとあまりいそいであるいたのか急に腰がいたくなって来た。ひとやすみしてあるきはじめたがどうしても腰がいたくてしかたがないので、杖になる物はないかとあたりを見まわしたが、あいにく棒切一つ落ちて居ない。その時ふと目についたのが少しはなれた所に小さな墓があって昨年あたり何年忌かに立てたであろうか卒都婆が見える。和助さんはそれを杖がわりに拝借して毘沙門堂へ急いだのでした。

毘沙門堂について見ると、えらい遊行上人のありがたいお説経とあって、軽井沢村や田代村畑村丹那村の村人達が、おおぜい集って、あとから来た和助さんは毘沙門堂に入ることが出来ません。しかたがないので和助は毘沙門堂の庭でお説経をきくことにしました。

やがて上人さんのお説経が始まりましたので和助さんは、そとうばをしっかりとにぎってのびあがるようにして上人さんの顔をながめながらありがたいお説教を一言もきゝもらさないように一所懸命でした。だが、どうしたことでしょう。不思議なことであるもので一所懸命きいている和助さんの耳にはたいへんありがたいはずの上人さんのお説経がきこえません。上人さんの声がなにやら「むにゃむにゃ」きこえるだけです。不思議におもって和助さんが毘沙門堂の中の人達を見ると、みんなたいへんありがたいお説経をきいて居るふうでなかには涙をながして居る人もあります。和助さんは、

「へんなことがあるもんだなあ。」と一人言をもらしながら

きいておりました。やがて遊行上人さんのお説教が終って、みんなありがたいお説経をきいてたいへんよかったと口々に話しながらそれぞれの村へかえったのであった。

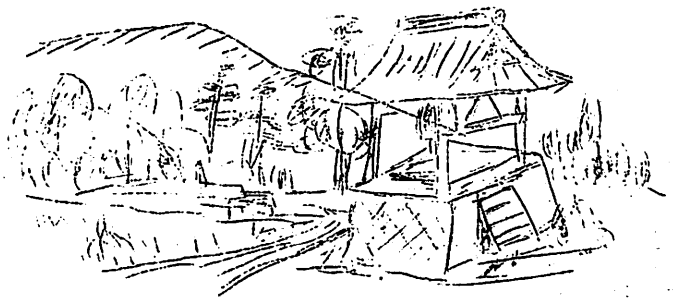
それから十日ほどたったある日、岩渕の方から来た旅人が軽井沢の茶店でこのような話をした。

「つい二三日前のことである。その日富士川を渡ろうとした遊行上人が川の手前であたりを景色をながめようとしたのか、乗って居たおかごから出た時であった。一匹の大きな犬が上人さんにおどりかゝって、たちまちかみ伏てしまったのであった。あたりに居合せた人達が驚いてようやく犬を追いはらって上人さんをかいほうしようとしてよく見ると、これはまか不思議、遊行上人と思って居た和尚さんは、大きなこうを丝た猩でありました。

富士川辺の村々では、おゝさわぎでした。そして上人さんをかみ伏せた犬は川越人足がかって居た「どん」と云う一毛の犬だったそうです。」

その話をきいた和助さんは、旦那寺の和尚さんに軽井沢村の毘沙門堂での話をしますと、旦那寺の和尚さんは、それは和助さんが卒都婆を杖について居たからで、そとうばのまか不不思議な力のおかげで猩の化けた上人さんの声がきこえなかったのだとおしえてくれ、卒都婆のれいげんあらたかさをお説経するのでした。

軽井沢のさる旧家に、この時の遊行上人使用のけさが珍蔵されていたとのことだが、今は定かでない。



農作業の唄

苗取り唄

苗取り上手の苗取りが
元へ元へと手を入れて
裏へ裏へと　かいなでる
ヨーイ今日は　苗の取上げ
いなごは　どこにとまろうな
奥山の　奥山の
くずの葉に　とまろうな

田植え唄

よういよい
ここは　殿の見おろし所
よく植える早乙女衆
ここは　殿の見おろし

よういよい
思う殿の田なれば　手苗細く
こざくに風波悪くて
まくり返す　稲の葉

田の草取唄

わしとおまえと　田の草をとればよ
降らず照らずの　曇り空よ
そうだ　まったくだよ
田の草取ればよ
降らず照らずの　曇り空よ

歌いなされよ　お歌いなされよ
歌じゃご気量は　さからないよ
そうだ　まったくだよ
お歌いなされよ

かあい男と田の草取ればよ
降らず照らずの　曇り空よ
そうだ　まったくだよ
田の草取ればよ
降らず照らずの　曇り空よ

ヨーイ　七つ下れば
こざるが上る
家の殿御は　いつ上る

麦つき唄

お麦をついて　麦ついて
お手手に　豆が九つ

九つ豆を見れば　生れた在所が恋しい
恋しくば　恋しくば
訪ねてきてみよ
信乃田の森のくずの葉

十七のさしたる櫛は
拾たかもろたか　よい櫛だ
よいはずだ　よいはずだ
お江戸じゃ品川
米屋の番頭の伊勢土産

（露木義俊氏　採録）

◇児童いろはうた

柏谷　養源寺
岩崎禅徹師作

いかに世の中開けても
ろくに学問せぬ者は
はじをかく事多からむ
にくまれ口は　きかぬよう
ほこり顔せず　出しゃばらず
へんじは　早くはっきりと
とくを養い　身を修め
ちゆう孝　二字を本とせよ

りっぱな人になりたくば
ぬけ目なきよう心がけ
る す居の時も光陰を
をしみて学べ よく学べ
わるき処に近寄らず
からだは いつも大切に
よ 中に寝冷 気をつけよ
たがいに身分考えて
れい儀作法を よく守り
そわそわせずに 落着いて
つねに教師の教えをば
ねんじ忘るること忽れ
なに程わが家富めりとも
らくにのみ 世は送られず
むりは通らぬものと知れ
うそは盗みの始めにて
ゐばるは 智慧の足らぬなり
のぼるほど 身を省みて
おんに報ゆる心せよ
く 労を親にかけぬよう
やさしくするは 子の役と
まめに手伝い 働きて
けっして 不平言う忽れ
ふ 自由するも 堪え忍び
ころは いつも浄くして
えきなき金 は費さず
て 足は ことによく洗い
あさ寝 宵寝をつつしめよ
さうじ洗濯身だしなみ
きょうだい仲よく学科をば
ゆだんなさずに 復習うべし
め 上におじぎ 友達と
みち草食わず 争わず
しょ物忘れず ちがえずに
ゑん路風雨の厭いなく
ひ 日学校に通いつつ
せい業すること明らかに
すゑは 栄えむ身も家も

（大正十年一月一日
一万部印刷 非売品）

◇婦人庭訓

作者 同前

いっ家団欒睦まじく
ろ 端に寄るが何よりぞ
はなし鈍でも 剪姑には
にこにこ顔で よく仕え
ほね惜しみせず働きて
へやの隅まで掃き浄め
とし寄子供いたわりて
ちかくの交際円くせよ
りぬい針洗濯怠らず
るすに戸締り固くして
をりをり拝め神仏
わかき時代は 二度となし
かせぐに貧乏追いつかず
よ 分の財は 貯えて
たらざる時の用意せよ
れい儀作法に身を正し
そうせぬよう気をつけて
つねにわが家の経済を
てもさめても忘るなよ
ない助は 妻のつとめぞや

らくの後には　苦あるぞと
むかしの人も言いおけり
うかうか世渡りする人は
みな鹿の類に劣るべし
のん気陰気にならぬよう
おやの言う事よく聴きて
くやしき事のありとても
やたらに腹を立つるなよ
まけるが勝つのたとえあり
けん母良妻わが身ぞと
ふだん夫に操たて
こどもは　十分教育し
ええん談前の娘には
て料理、活花、琴や茶も
あさな夕なに習わせよ
さいた桜も散る習い
きのうの花嫁　今日は老
ゆめと月日は　過ぎ易し
めい惑かけず　義理かかず
みにぼろをまとうとも
し孫の繁昌心がけ
ゑん満の徳　養いて
ひとたび道を尽しなば
も皆足りて　家栄え
せ間稀なる婦人ぞと
すべての人に　うたわれむ

岩崎禅師は、大正年代、青少年や婦人等に呼びかけて、家庭を明るくする運動にてい身され、真に禅僧として世の木たくとして活躍された方である。以上二篇の外に、青年訓、家庭教訓等があるが、ここには省略する。（鎌木記）

◇酒の仕込み唄

酒屋の屋根で　鳩が鳴く
何と鳴く　夜が明けた
トウジ起きろよと　サッテハエ

◇農兵節

三島市誌によれば、元田草取唄から転化したものだろうとあり、調率のよい所から江川氏が農兵調練に利用、後敬平井源太郎氏がピクターで赤坂小梅によりノーエ節を吹き込んだので全国的有名な歌謡として、静岡県を代表する歌謡として全国を風靡した。（昭和七年一月）

一、富士の白雪ゃノーエ
　富士の白雪ゃノーエ
　富士のサイサイ　白雪ゃ朝日で溶けて
二、溶けて流れてノーエ
　溶けて流れてノーエ
　溶けてサイサイ　流れて三島へ下る
三、三島女郎衆はノーエ
　三島女郎衆はノーエ
　三島サイサイ　女郎衆はお化粧が長い
四、お化粧長けりゃノーエ
　お化粧長けりゃノーエ
　お化粧サイサイ　長けりゃお客が怒る

五、お客怒ればノーエ　　お客怒ればノーエ
　お客サイサイ　　怒れば石の地蔵さん
六、石の地蔵さんはノーエ　　石の地蔵さんはノーエ
　石のサイサイ　　地蔵さんは頭が丸い
七、頭丸けりゃノーエ　　頭丸けりゃノーエ
　頭サイサイ　　丸けりゃ烏が止まる
八、烏止まればノーエ　　烏止まればノーエ
　烏サイサイ　　止まれば娘島田
九、娘島田はノーエ　　娘島田はノーエ
　娘サイサイ　　島田は情でとける。

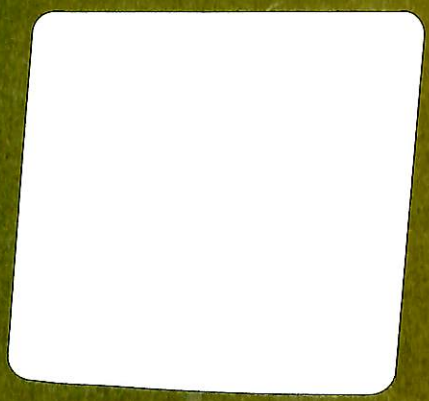
あとがき

「函南町のむかし話と伝説」の第一集がようやくできあがりました。資料収集委員の方々には大変お骨折りをかけ、ほんとうにありがとうございました。なお掲載文の中には一部、歴史研究会誌より抜すいさせていただいたものもありますので、末尾乍らお断わり申しあげます。今後更に資料の収集に努めて第二集以降のものを発刊すると共に内容を深めていきたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

資料収集委員

大土肥　松井善作
柏谷　佐藤信義
平井　梶尾是彦
軽井沢　渡辺宗正
桑原　森　義光
上沢　露木義俊
間宮　吉田秀雄
塚本　仁菅信吾

昭和五十四年三月
函南町教育委員会
印刷　日進印刷



函南町中央公民館図書室
11022180 1